
雨の音

進藤 翡翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨の音

【Nコード】

N0916Z

【作者名】

進藤 翡翠

【あらすじ】

「雨の音は寂しく、想いを募らせる」

一年前に事故で恋人を失った男、松谷鷹一が過ごした梅雨の季節の物語。

梅雨の入りの日。

ピンク色のカーテンの隙間から、薄淡い光が差し込んで部屋の中を浮かび上がらせる。眩しくない程の弱い光。外からは雨音が聞こえている。雨の日の仄かな明るさが、部屋に注がれて、光と暗黒の境界を作り出していた。

朝、起きるのが辛い。身体が重い。起きたくない。そう思いながらも、目を擦りながら松谷鷹一は、むくり、と上半身を起こす。欠伸を一つ、時計を確かめる。眠たい。だけど、これからある用事の事を思い出す。そろそろ起きて準備をしておかなければならない。着替えていると、インターホンが鳴った。

鷹一は、元氣のない足取りで居間に設置されたインターホン親機の前に立つ。モニターに映る玄関前の映像には、少しやつれたスーツ姿の男が、傘と紙袋を持って直立していた。

約束していた時刻に寸分狂わずやって来たスーツ姿の彼は「戸部です」と呟いた。スピーカー越しの彼の言葉に、鷹一は受話器を手にとって返答する。

「今、開けます」

鷹一は玄関まで移動し、ドアを開錠し、冷たいドアノブを捻って開け放つと、戸部と名乗った男が先程と同じ直立の姿勢で待っている。扉を開けて現れた鷹一を見た戸部は一度鼻を噉り、深々と頭を下げる。

十秒。二十秒。三十秒を待った鷹一は、自分が何かを言わなければ、この男は延々と頭を下げ続けているだろうと感じて、「頭を上げて下さい」と鷹一は申し出る。

頭を上げた戸部と、目が合う。覇気の無い目。このような目を、鷹一は初めて見たように思える。生気の抜け落ちたような、そんな目を前にして、鷹一はどう対応するべきか困った。

鷹一は、「どうぞ」と手で玄関の方へと指し示して戸部を中に上げる。「では」と、蚊の羽音にも取れないくらい小さな声で戸部は答えて、とぼとぼとした足付きで数歩程歩く。彼は玄関に入った途端、紙袋を床に置き、膝を床につけ、両手も床につけ、土下座する。「この度は、申し訳ありません」

戸部がこうも謝罪するのには理由があった。

一年前の今日と同じような激しい雨がアスファルトを強く叩きつけていた日、鷹一の恋人であった早川紘子という女性が、戸部の運転する車に轢かれて亡くなった。戸部が余所見をして、赤信号の交差点に突っ込んだらしい、と後に鷹一は聞いた。

だから戸部は鷹一の自宅のあるマンションまでこうしてやって来て謝罪した。

一年という長い時を経たが、鷹一は今でもあの時の事をはっきりと思い出す事が出来る。雨の中を病院まで駆け、何も反応を返してくれない彼女と対面したその時の気持ちや、雨に打たれて凍えていた身体の震えを覚えている。むしろ忘れたくない、とさえ思っている。

鷹一が戸部から電話を受けたのは数日前。自動車運転過失致死傷罪で約一年の服役を終える彼から、出所する翌日に直接謝罪に出向きたいと言って来た。事故直後の警察などへの態度から、彼が本心で謝罪している事を鷹一は知っていたから、彼を快く受け入れて、そして細かな時間を取り決めていた。電話での鷹一に対する戸部の対応も、真摯な物であり、鷹一は一切の不快感を彼に対しては感じる事は無かった。

鷹一は額を床に押し付けている戸部を見ても、殴ってやろうとか、殺してやろうという風な感情を抱きはしなかった。ただひたすらに謝罪している戸部を見て、寧ろ可哀想だと思えた。

とりあえず鷹一は戸部に謝るのを止めさせて、彼を家に上げる。戸部は一礼してから、靴を脱いで家にかかる。ソファに座ると持つて来た紙袋から、綺麗な包み紙で梱包された箱を取り出してテープ

ルに置く。テーブル上を滑らせるように、鷹一のいる方へと差し出してから、戸部は、

「此処に来る前に購入して来ました。手ぶらで来るのは、失礼かと思ひまして。どうぞ受け取って下さい」

消え入りそうな程弱々しい声で言った。

ピンと張った背中で座っている戸部を横目に、鷹一はそれを受け取る。

「頂きます」

鷹一はその場で丁寧に包み紙を外す。戸部はその作業を見つめていた。包み紙を外して現れたのはクッキーらしき写真が堂々と飾られている箱だった。これを見たら紘子はきつと喜ぶだろう、と鷹一は想像する。彼女はこの手の食べ物好きだった。鷹一自身は、全く嫌いという程ではないが、あまり甘い物は好きではない。彼女が居たらすぐにも無くなっているだろうと思ひながら、きつと一人ではいつまで経っても減らないであろうこのクッキーを気の毒に感じた。

そんな鷹一の心を見透かすように、「クッキーはお嫌いでした？」と、戸部は鷹一に問うた。「いえ。自分も彼女も好きでした」と鷹一はお世辞で答える。戸部は気まずそうな顔をする。ふと自分の発現を見返して鷹一は、この返答が戸部に対して意地悪だったと反省する。

お互いが黙る。空気が重苦しい。この重い沈黙を打ち破る事が出来るのは自分だけなのだろう、と鷹一は立ち上がって、

「お茶、いりますか？」

と訊いたが、

「あ、いえ、お構いなく」

と戸部は手を振るような仕草で遠慮を示した。しかし、鷹一はキッチンに移動して、冷蔵庫から麦茶を取り出し、コップに注ぎ、戸部の前に置く。

置いたら受け取れないと思ったのだろう、戸部はテーブルのコッ

プに手を伸ばして、

「すいません。じゃあ、頂きます」

喉が渴いていたのだろうか、戸部はまず一口麦茶を含んだ。そして、戸部はコップをテーブルに戻す。口の中の茶を喉に流し込む。冷たい麦茶で渴いた喉を潤す。生き返ったように息を吐き出してから、戸部は本題に移る。

「謝るというにも、ただ謝ってそれで終わり、と言う風には出来ないのは私も分かっておりますから」

と、言いながら再び紙袋の中に手を入れ、茶封筒を掴み出してテーブルに差し出す。多少の厚さのある茶封筒。中身は鷹一にも容易に想像が出来た。

戸部は俯き加減に口を開く。

「お金で解決出来ない事も、慰謝料も、これでは到底足りていない事は分かっています。でも、これが私の払える限界でして。職は、勤めていた会社は、この一年で、解雇されました。これで許して下さい。いえ、許して貰えないのは覚悟しています。それでも、本心では、やっぱり、許して頂きたいのです、けど」

途切れ途切れ、言葉を一つずつ選ぶようにして戸部は言う。そんな戸部に対して、鷹一は正直に答える。

「許すも何も、別にあれは故意の事故では無かったのですから」

「それでも、結果として私は、貴方の大切な方を……。許して頂けるまで、何度も通う覚悟で今日は来ましたので」

戸部は、少し見開いた目で鷹一を見た。鷹一は壁に掛かったカレンダーの方を見ていた。一年という時の経過を、染み染みと感じていたのだろう。鷹一は視線を戸部に移す。戸部は咄嗟に俯く。

先程まで見られていた事に全く気付かずに鷹一は、

「あれから、もう一年も経ちました。紘子も、戸部さんの誠実さを見て、きっと許していると思いますよ」

気休めにもならないかもしれないような言葉だと自覚しながら言った。

戸部は涙ぐむような仕草を見せて、ず、と鼻を嚙り、コップに残っていた麦茶を一気に喉へと流し込んだ。封筒を突き返そうとしていた鷹一に、戸部は再び封筒を突き出す。受け取れと言わんばかりの戸部の決意を無碍には出来ないと思つて嘆息した。

戸部は頭を下げた。

「これは私のケジメ、贖罪です。どうか、どうか受け取つて下さい」
「……分かりました」

鷹一は折れ負けた。

戸部は、鷹一が封筒を不承不承受け取つたのを確認すると心底安堵して肩を撫で下した。

これで過去の全てが許された訳ではないと戸部は理解している。しかし、鷹一に対して、自分の抱く贖罪の気持ちが多量でも伝わつたと戸部は思っていた。

実際それは鷹一に伝わっていた。

戸部は鷹一を直視しながら、精一杯、言葉を紡ぐ。

「本当に、早川さんも私を許してくれるのでしょうかね？」

鷹一は何かを返さなければ、と言葉を考えたが、考えると考える程に、憶測でしか絃子の気持ちや代弁する事など出来ないと思ひ知つた。許しているだろうという希望的観測でしか、鷹一は物を言う事が出来ないその歯痒さに、砂を噛むような思ひで、ただ沈黙を守つた。

何の言葉も見出せないままの鷹一に、戸部が訊く。

「早川さんにも直接謝罪して、線香をあげさせて貰つてよろしいですか？」

鷹一は絃子の仏壇のある部屋の方へ顔を向け、躊躇なく、即答する。

「ええ。絃子も報われると思います」

鷹一は戸部を絃子の仏壇のある部屋へと案内する。
きつと絃子は戸部を許している、と信じながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0916z/>

雨の音

2011年12月3日15時55分発行